

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32309

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17533

研究課題名（和文）術後膵臓がん患者が前向きに生きるための外来看護支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an outpatient nursing support program to help postoperative pancreatic cancer patients live positively

研究代表者

安田 弘子（Yasuda, Hiroko）

群馬パース大学・看護学部・助教

研究者番号：90805904

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、術後膵臓がん患者が前向きに生きるための外来看護支援プログラムを開発することである。インタビュー調査より、外来通院にて術後補助化学療法を継続している膵臓がん患者が末梢神経障害に苦しんでいることや家族と支え合いながら闘病していることが明らかになった。また看護支援に関する文献検討より、患者と家族の思いの表出を促すことや補助化学療法に伴う有害事象に対するセルフケア能力向上に向けた支援が重要であることが明らかになった。術後膵臓がん患者が前向きに生きるためには、外来通院の際に患者と家族が思いを表出できる環境を整えることや、末梢神経障害のセルフケア能力向上に向けた外来看護支援が求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

難治性がんである膵臓がん患者が、手術療法後も補助化学療法を継続しながら前向きに生きるためには外来看護支援の充実が求められる。本研究では、術後膵臓がん患者が外来通院にて術後補助化学療法を継続するなかで、患者が末梢神経障害に苦しんでいることや、術後も家族とともに闘病していることが明らかになった。また、難治性がんとともに生きるという困難がありながらも、いまを前向きに生きようとする様相が伺えた。以上より、患者の前向きな思いを強みとし、有害事象に対するセルフケア能力の向上が図れるように支援することが重要である。さらに、限られた時間のなかで、患者と家族が思いを表出できる場を整えることも必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop an outpatient nursing support program to help postoperative pancreatic cancer patients live positively. Interviews revealed that pancreatic cancer patients who are continuing postoperative adjuvant chemotherapy as outpatients are suffering from peripheral neuropathy and that they are fighting the disease while supporting each other with their families. In addition, a literature review of nursing support revealed the importance of encouraging patients and their families to express their feelings and supporting them to improve their self-care skills in response to adverse events associated with adjuvant chemotherapy. In order for post-operative pancreatic cancer patients to live positively, it is necessary to create an environment where patients and their families can express their feelings during outpatient visits, and to provide outpatient nursing support to improve self-care skills for peripheral neuropathy.

研究分野：がん看護学

キーワード：術後膵臓がん 術後補助化学療法 外来看護

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

膵臓がんの5年相対生存率は7%と、多くのがん種のなかでも最も低く難治性がんといわれている。膵臓がん治療の第一選択は手術療法であるが、そのほとんどが進行がんであることや術後も再発・転移しやすいために、たとえステージで発見されたとしても5年生存率は20%と低い。このような状況で、患者は常に死に脅かされながらも、試行錯誤しながら自分らしい生き方を見いだしている(吉田,2014、安田ら2021)。

手術療法を終えた膵臓がん患者は術後補助化学療法のために外来通院することとなり、患者が手術療法後も前向きに生きるためには、外来看護師による支援が重要である。しかし、外来看護師は「患者が療養生活を送るにあたって不安や問題を抱えていることは理解しているが、その具体的な内容が何であるかまではわからない」「患者の心理・社会面まで関わることができない」と短い来院時間内で患者への支援に困難を抱えており(本間ら,2004)、十分な支援体制が整っているとはいえない。

金子ら(金子ら,1998)によると、膵臓がん患者の苦悩は困難や痛みなどの様々な要素が影響し合って複雑化していると述べられており、患者が下痢などの消化器症状や、うつ病の発症に悩まされていることが明らかになっている(板尾ら,2002)(Karen,2010)、膵臓がん患者を対象とした研究は少なく患者の困難と看護支援が十分に明らかにされているとはいえない。

よって、まずは、術後膵臓がん患者の苦悩を明らかにし、患者の特性を踏まえた具体的な外来看護支援プログラムの開発が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、術後膵臓がん患者の苦悩を明らかにし、術後膵臓がん患者が前向きに生きるための外来看護支援プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 外来通院にて術後補助化学療法を継続している膵臓がん患者が抱く思いに関する研究(インタビュー調査)

データ収集方法

研究対象

研究対象者は、A病院において、膵臓がんの手術を受けた後、外来通院で術後補助化学療法を受けている患者で、がんの告知を受けている20歳以上の者、初発の膵臓がん患者で、遠隔転移のない者、手術療法及び術後補助化学療法を受けている者(今回は特に術式と抗がん剤の種類は規定しない)、通院しながら補助化学療法を受けている者、質問の意図・内容を理解することができ、かつ言語的コミュニケーションが可能である者、社会生活を営む上で、自分の身の回りのことはすべて可能であり、本研究の面接調査が可能であるPS(Performance Status)0~1の者、主治医より、身体状態や精神状態が安定しており、調査依頼が可能であると判断が得られている者を対象とした。

インタビュー調査は、インタビューガイドを使用し、膵臓がんと告げられてから今にまでの思い、手術して退院してから悩んだこと困ったことといった対象が認知している主観的な体験について語ってもらい、ICレコーダーに録音した。インタビュー回数は、対象の身体的・精神的負担を考慮し1回とした。

研究期間

2023年8月~2024年3月

分析方法

インタビューで得たデータを逐語録におこし精読し、全体の内容の理解に努めた。その後以下の手順に従い、対象ごとに分析した。

まず、外来通院にて術後補助化学療法を継続している膵臓がん患者の思いに関連する記述部分を対象者の言葉のまま抽出した。次に、抽出した記述部分の意味を損なわず、なおかつ隠された主語や目的語などを補いながら内容が明確になるよう書き表しコードとした。そして、対象にとって意味内容が同類のものを集め、共通する意味を表すように表現した。これをサブカテゴリとした。サブカテゴリをさらに抽象度を高めて本質的な表現を表すよう表現し、カテゴリとした。分析の信頼性・妥当性は、共同研究者間で繰り返し検討することにより確保した。

用語の定義

・思い：広辞苑によると、思いとは、「思う心の動き・内容・状態のことをいい、その対象について心を働かせることやあれこれ心に掛けてわずらい、または嘆くこと、心配、また、何物・何事かに働き掛ける気持」と定義されている。また、感情は、「喜怒哀楽や好悪など、物事に感じて起こる気持」と定義されている。

本研究では、『思い』を「膵臓がんの手術および術後補助化学療法を継続する患者の思考や願いを含めた感情」とした。

倫理的配慮

所属施設および研究実施施設の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：PAZ22-32-1）。本研究では、術後であるとともに補助化学療法を継続している膵臓がん患者を対象としていることから、患者の体調が変化した場合に診察を依頼できるように、外来看護師及び担当医師と事前に十分に相談し、体制を整えた。また、体調不良に対し適切に対応することについて、文書および口頭にて十分に説明し、同意を得た。

（２） 治療期にある膵臓がん患者の家族支援の課題に関する文献検討

対象文献の選出

医学中央雑誌 Web 版（法人版）を用いて、データベース検索を行った。キーワードを「膵臓がん」and「患者」and「看護」and「原著論文」とし、検索期間は「2013年～2022年」の10年間とした。107件の論文が抽出された。そのうち、タイトル、抄録を読み、「膵臓がん患者を対象としていない」、「治療期ではない」、「看護研究ではない」、「文献検討」を除外したところ、38件となった。文献の取得不可であった1件を除き、残りの37件の文献の本文を精読し、「膵臓がん患者を対象としていない」「膵臓がん患者の家族に関する記載がない」「治療期ではない」を除外し、21件の文献を分析対象とした。

分析方法

対象文献を精読し、対象論文のリストを作成した。リストには、著者、論文タイトル、掲載雑誌名、発表年、研究対象者、研究方法を項目として挙げた。次に、治療期にある膵臓がん患者の家族支援を明らかにするために、対象文献を精読し、質的帰納的に分析した。まず、対象文献の結果および考察に記載された治療期にある膵臓がん患者の家族への支援に関する記述を抽出し、コードとした。さらにコードから内容を類似性と相違性を考慮しながら、カテゴリ分類した。分析過程において、共同研究者と検討を重ね、分析内容の明解性と信用性の確保に努めた。

用語の定義

・ 家族

血縁関係に関わらず、診断前から患者と情緒的なつながりを持ち、療養生活をサポートする者とした。

・ 家族支援

治療期にある膵臓がん患者が家族に関して述べている思いや家族の思い、看護者が行う家族への配慮や行動、具体的な支援を含むものとした。

4. 研究成果

総合病院にて膵臓がんの手術を受けた後、外来通院にて術後補助化学療法を継続している膵臓がん患者にインタビュー調査を行い、患者の思いを明らかにした。患者は、再発・転移が心配だ しびれや目の見えにくさが治ってほしい 家族とともに膵臓がんを闘っている 食欲はわからないが頑張って食べるようにしている 膵臓がんの検査や手術、抗がん剤治療を乗り越えられた 手足のしびれのせいで思うように暮らせない ごはんや野菜の甘みがきつく感じる 家族が自分の病気を心配している 家族の助けがありがたい 今後の人生はなるようにしかない といった思いを抱きながら治療のために外来通院していることが明らかになった。

患者は侵襲の高い膵臓がんの手術を乗り越えられたことや、これまでの治療過程において、医師や看護師といった医療従事者の支えがあったことを自身の強みとしていた。松本ら（松本ら, 2022）は、化学療法を受ける膵臓がん患者が自分のこれまでの生き方や経験に誇りを持ち、膵臓がんを乗り越えていける力が自分にはあると自信を持っていたことを明らかにしている。本研究では、これまでの患者自身の経験に加えて、膵臓がんの治療を乗り越えた経験が自信につながっていることが明らかになった。よって、患者が膵臓がんと告知されたときより、検査や治療が順調に経過することや、辛い治療でも患者が納得した形で乗り越えられるように医療従事者がチームとなって支援することが重要である。

患者は、食欲不振や味覚変化、末梢神経障害といった術後補助化学療法に伴う有害事象に苦しんでいた。特に末梢神経障害に苦しんでおり、家族とともに試行錯誤しながら生活の質を低下させないように試行錯誤していた。患者が外来通院した際に、有害事象に関するアセスメントをし、患者がセルフケアできるように支援することが求められる。また、患者と家族が互いに支え合いながら闘病できるように支援することも必要である。

また、本研究の対象者は、今後の人生はなるようにしかない と今の状況を重く考えずに過ごし、しびれや目の見えにくさが治ってほしい と治療に期待していた。難治性がんとともに生きるという困難もありながら、前向きに今を生きようとする様相が伺えた。研究者が以前行った研究（安田ら, 2021）では、術後膵臓がん患者の気持ちは揺らぎやすく、死の不安が強かった。本研究で得られた結果は、術後膵臓がん患者の新たな側面であると考えられる。患者が治療に期待していることやいまを前向きにとらえて過ごしていることを患者の強みとし、支援することが重要であることが示唆された。

治療期にある膵臓がん患者の家族支援に関して、国内論文を対象に文献検討した。対象となった21件の論文より、看護支援として、患者のみならず家族からも療養生活の受け止め方などの思いや意見を聞くといった「患者家族双方の思いの表出を促す」こと、「医師の説明の補完をする」こと、「補助化学療法に伴う有害事象への対処行動の掲示や情報提供をする」ことなどが明らかになった。外来は入院時と異なり、患者と看護者が関われる時間は限られている。また、家

族が患者に同行してくる機会も多くはない。患者と家族が外来通院の限られた時間に、必要な看護支援を受けるためには、患者と家族が思いを表出できる環境を整えることも必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石井 美希 (Miki Ishii)		
研究協力者	堀越 政孝 (Masataka Horikoshi)		
研究協力者	萩原 英子 (Eiko Hagiwara)		
研究協力者	二渡 玉江 (Tamae Futawatari)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------